

大阪の高校生、気仙沼へ。 かけがえのない「何か」を掴んだ4日間

「がんばろう！つばさネットワーク」

できたての「たこ焼き」を
避難所の皆さんに

ゴールデンウィークの5月2日から5日にかけて、茨木市の府立・北摂つばさ高校の皆さんが気仙沼でボランティア活動に取り組みました。

同校では震災後、生徒から「自分たちも何かしなければ」という声があがっていたといえます。そこで藤井伸二先生らを中心に、同校教員・PTA有志、普段から授業に協力している地元NPOや人権団体で「がんばろう！つばさネットワーク」を結成し、今回のプログラムは企画されました。

活動場所を気仙沼にしたのは、藤井先生が社会人入学している大阪市大大学院関係者の家族の被災がきっかけです。院の修学生に気仙沼出身者（坂口一美さん）がいて、彼女は行方不明の家族の捜索をかねて、大阪での仕事をやめ、気仙沼でボランティア活動を開始しました。ご家族は無事に発見されましたが、坂口さんは避難所に泊まりこんで、予定通り被災者の支援を始めていました。



避難所となっている中学校で鯉のぼり揚げに協力

「高校生でもできることはいろいろある」、そんな彼女の言葉もあって、今回の活動が計画されたのです。

高校生29人を含む40名の一行は、5月2日（月）の夕方、2回目となる阪急・茨木市駅前での募金活動を終え、バスで気仙沼へ。翌3日（火）は、被災地の惨状に驚きながらも、避難所となっている階上^{はじかみ}中学で鯉のぼりを揚げ、その後は、同じく避難所となっている新月^{にづき}中学で大掃除をし、被災者の皆さんにたこ焼きをふるまいました。「おいしいよ…の言葉に、逆に僕たちが励まされました」とリーダー役で3年生の豊田龍之介さん。



さすが大阪の若者。たこ焼きづくりはお手のもの？

被災地の高校生とも交流

現地2日目となる翌4日（水）は、市内2ヶ所の公園を清掃。海岸線から5km離れた公園ですが、地面は黒いヘドロに覆われていました。それをスコップで除去していくと、グラウンドは見違えるほどきれいに。眼に見える成果に「きてよかった！」という活動の満足感が広がります。

「正直に言うと、私にとって今回の震災は、遠い出来事でした。現地に入っても、自分の無力さを感じるばかり。でも公園で私の腕を強く握り締め、遠いところからありがとう」というおばあさんの言葉に、思わず泣きそうになりました。一生忘れませんと1年生の谷口小春さん。

その後は、地元・気仙沼高校へ。大阪で集めた義援金15万5,845円を渡し、同校の生徒たちと交流。一緒にかけつ



公園の清掃も、2つめとなると要領をつかんでスムーズに



気仙沼高校の生徒たちとも笑顔で交流



出発に先立ち、2回にわたり募金活動

こをしたり、恋愛談義に花を咲かせたり…と、若者同士がホッペで交流。帰阪後は、早くもメール交換をする生徒もいて「今回を機会に、学校間の交流が深まれば」と藤井先生。
坂口さんたち、受け入れ側のお世話になりながらも、誰に強制されることなく自主的に参加した今回のボランティア活動。帰阪後の感想は、みんな一様に「参加してよかった！」。つばさ高校の生徒たちは、かけがえのない「何か」を掴んだようです。